

『鉄格子の向こうで御光をつかむ——サンディマン自伝』

(サンディマン口述、オッキー・ムタキ編、タジドウ出版、二〇〇六年)

訳と解説 佐々木 拓雄

翻訳

私は、一九六三年一〇月二一日、ジョグジャカルタ市の西南三二キロほどにあるジョグジャカルタ特別州クロン・プロゴ県ルンダ郡シドルジョの寒村グンタンで生まれた。子どもの頃はサディマン。成人してヌル・ハディ・ウイドドと名を変えたが、世間は私をサンディマンと呼んできた。父の名はウォンソ・アテモ、母の名はポニエム。私は三男二女からなる五人きょうだいの三番目にあたる。両親は、どこの村にでもいる貧しい小作農であった。私の生まれ育った社会には、宗教的に厳かな雰囲気もなかった。なにせ、家から最寄りのモスクまで二キロも離れていた。アスファルトの敷かれた道路にたどりつくまで六キロの距離があった。集落は、プロゴ川の西方四キロほどにある丘陵地帯のてっぺんに位置していた。周囲の道は粘土質で、少しでも雨が降ると足を滑らせてしまうような所であった。

多分に孤立したこの自然環境のせいで、集落における住民の生活は内向きなものとなっていた。畑仕事のあとの余暇の時間を埋めるために、賭け事をしたり、酒を呑む者が多くいた。そのような環境で育った私は、小学三年になる

九歳のときには、もうすっかり賭博の世界に身を浸らせていた。オトックやダドウ、チュキやレミ、ガブルなど、日頃からさまざまな博打にどっぷりと親しんでいた。あたかも賭博は、それがなくては生きていく気がしないほど、私の生活のすべてであるかのようなようだった。

子どもの誕生や婚礼、葬式など、なんらかの儀礼があるときは、集まった村人の中で賭博が催された。私の生家ではとりわけそうしたことが頻繁にあった。なぜなら、成人したのは五人であるが、母は一五度の出産を経験していた。そのため、毎年のように自宅に儀礼が執りおこなわれ、同時に賭博の場が提供されたのである。自宅に身を置くだけでも、私はさまざまな種類の博打を学び、熟達の域に達することができた。ことに父は、儀礼とあらば、近隣のみならず、村じゅうの家々のどこへでも私を帯同して出向くのが常であり、当然のようにそこではいつも賭博が開かれていた。そうして賭博場を渡り歩いた結果、私はまもなく、数人の隣人とともに自ら賭博を催し、胴元をつとめるまでになった。

めったに負けなかったこともあって、私はずぶずぶとその背教的な行為にのめりこんだ。私の毎晩の活動といえ、村の儀礼を渡り歩き、賭博を催すことであつた。それに没頭するうちに、学校に通って勉強することが億劫になつた。しょっちゅう欠席していたため、幾度か放校処分にあい、そのたびに別の学校に入り直した。やがて小学五年に上がったころ、学校そのものをやめることにした。私の学歴はそこまですなつた。博打に負けたり、賭博のための資金が必要なとき、私はしょっちゅう親の金を盗み取っていた。親が金を持たないときは、庭で飼われている鶏をつかまえ、鶏肉商人に売り渡して金にした。隣家の敷地の鶏や、収穫を待つ畑のトウモロコシ、あるいは果物などに手を出して、金に変えることもよくあつた。

孤立した寒村の育ちの者が往々にしてそうであるように、私もまた、自らについて自信のもてない人間であつた。

一人の若者として、モダンな風潮に乗っていかなくては堂々と生きられないような気がしていた。モダンな若者であるという証を得るために、集落の外に多くの友人を作った。結果として私は、その友人たちの影響を受け、賭博だけでなく、女遊びにもめりこんでいった。サマソ海岸の売春宿に出入りするようになったし、さまざまなタイプの売春婦を求めて、ジョグジャカルタのトウグ駅前前の陰鬱な売春街であるパサル・クンバンにも入り浸った。

私が割礼を受けたのは、田舎の子どもにしては遅く、一四歳のときであった。しかし私は、一〇歳か一一歳の頃にすでに、同村の女の子たちを相手に多くのセックスの経験を積んでいた。農村の男子と女子は通常、昼間に牧場で、家畜のための干し草集めの仕事をする。それぞれの家から仕事に出て、牧場で二人きりになることもよくある。そこで最初は互いを見やりながら、やがて敷地内の茂みのなかで、干し草に身を横たえて性行為に及ぶようになる。通常、こうした行為は好き合った男女の間に成立する。最初は互いの恥部をひつつけあたりして、それで快感を得ると、より本格的な性行為にうつる。もし相手との間に好き合う感情がない場合は、そう、私は力づくで相手にその行為を求めた。割礼より前に、私は、近隣だけで一八人ほどの女の子と関係をもっていた。性欲が頭のとっぺんまで達してどうしようもなくなったときは、動物でその欲望を解き放った。雌の大きな鶏を見つけると、性欲を満たすためにそれを引つつかんだ。ときにはヤギさえもが私の性行為の相手となった。

村の生活に飽きた二五歳のとき、ある隣人の勧めもあって、ジャカルタへ出稼ぎにでた。ジャカルタに着くと、私はすぐに、ラワマンダンのプガンピラン通りにあるリー・チョンという飲食店経営者の店で、普通の使用人として働

1 オトツクはサイコロ博打、ダドゥは六角形のサイコロを使う博打、チュキはドミノ、レミはブリッジ、ガブルはコイン投げのゲーム。

いた。飲食店の給仕や警護の仕事であったが、半年しか続かなかった。その後は、ぶらぶらしながら生活することを選んだ。実際、屋内よりも道端で働くほうが気持ちよかった。チキニ方面やチュンパカ・プテイ、クラマツ・トゥンガなど、ジャカルタ市内の複数の場所を動き回った。その頃に私は、警備業を営むロビー氏と出会った。私は、彼のフルネームも出身地も知らなかったが、彼のものでラワマングンのラーマ映画館の脇に位置する、とある飲食店で警備の仕事をするようになった。だが、ロビー氏との生活に耐えられたのもわずか半年だった。ロビー氏は気性が荒く、やたらと私を殴った。傷だらけにされ、こめかみから血が噴き出すほど殴られたこともある。そんなこともあって、とうとう私は、自立して生きる以外に道がないことを悟った。そして、チュンパカ・プテイからチキニまでの界限でスリをしたり、その片棒を担ぐようになった。その当時、スリなどというのは、今とはずいぶん違って楽な仕事だった。

一九八〇年、ジャカルタの生活にも飽きた私は、ジョグジャカルタに帰り、クロン・プロゴ県ガルール区のプロソットで兄とともに暮らし始めた。新しい環境のもとで私はまた賭博に浸り、バントウール県サマスの売春街に出入りした。そして、窃盗や強盗をはじめとした重犯罪の世界にも足を踏み入れた。はじめのころ私は、現場の状況が安全であるかどうかを下調べする偵察屋の仕事をしていた。しかし、捕まったときのリスクの大きさは実行犯と大差ないにもかかわらず、偵察屋の取り分といえど収穫の五%にすぎなかった。私はそれを少なすぎると感じ、まもなく、より大きな利益を求めて実行犯に転向した。

一九八三年の一月三日に結婚してからは、私も堅気の生活を送ろうとした。家族を養うために鶏肉商人として働いてみた。しかし、この鶏肉商売の世界で私が耐えられたのはわずか七ヶ月であった。最初の子どもが生まれることがわかり、物入りを感じた私は、あるとき、手っ取り早くお金を得るために、プロゴ川から砂をはこぶ運送車の報

償金を箱ごと盗んだ。結局、私は警察に捕まり、三八万ルピアを窃盗した罪でクロン・プロゴ県ガルール区の警察署に一週間留置された。最初の子が生まれたのは一九八四年であった。その二年後には次の子が生まれることになる。

窃盗に対する処分を受けたあと、私は、窃盗をはたらないほど要害堅固な存在に自らを作りあげようと、クジャウエンの呪術の習得に励んだ。ジャワ暦の活用とともに複数の聖地で実践されるルラク³を行った後は、実際にしかに、悪事をはたらなくても捕まることがなかった。ジャワ暦の活用において重要なのは、七日の曜日と「市の立つ日」（五曜）の調整である。その方面での研鑽を積む一方で、一九九二年に私は、バンドン出身でクロン・プロゴ県在住のある人妻を誘い出し、四〇日間連れ歩いたという理由でワテスの警察に勾留された。もつとも、両親や兄が私を引き取りに来たため、このときの勾留期間は長くはならなかった。その一年後、テレビ窃盗のことで、クロン・プロゴ県ワテスの施設に再び勾留された。女性をめぐる問題で警察の世話になることは少なくなかった。ングンタック・ルジョに住む人妻を三ヶ月連れ出したあげく、警察に捕まり勾留されたこともある。

悪事を実行する前、私は、七曜と「市の立つ日」の合計の数値と農村に伝わる日の数値を考え合わせることに勤しんだ。その全体の合計が三で割り切れれば、盗みをはたらなくても捕まらない。しかし、三で割って一の余りが出たならば、それは危険の兆候であり、必ずや捕まってしまう。三で割って余りが二であれば、多少はましであり、捕まるかどうかかわからないといった具合である。非イスラーム教徒の中国系住民の家で盗みをはたらくのはとても簡単だった。彼らのほとんどは、ダヤン⁴や精霊を家に宿らせていた。私の呪術が格において劣るのでないかぎり、ダヤンや

2 クジャウエンは、「ジャワ神秘主義」と訳されることが多い。ジャワの風習であり、生き方の指針となるもの。

3 ルラクとは、いわゆる苦行をさす。たとえば、米と水だけで三日間過ごすなど。

4 ダヤンとは、気ままで利己的な多くの精霊と異なり、進んで人を助ける精霊のこと。あるいは守護霊。

精霊を無力化させるのは造作ないことだった。反対に、盗みに入ってもうまくいかないのは、主人が夜の礼拝を几帳面に実践する家であった。記憶のかぎりであれば、そのような家で私は一八度も窃盗に失敗した。家の中に侵入できたとしても、主人が夜間の礼拝を行っている最中だと、何も盗まず、急いで踵を返したものだ。

一九九二年、私はマグランで強盗をはたらいたあと、警察の追跡から逃れるために、八ヶ月間、スラカルタ市のバンジャルサリに身を置いた。その強盗行為は、手早く多額の金を手に入れたいがために及んだものだった。たしかに私は、賭博の世界では負け知らずといえるほど強かった。だが生活は女性に溺れて贅沢三昧であった。人妻をさらって四〇日間連れ歩くことを想像してほしい。その四〇日間のうちに三〇〇万ルピアは使うことになる。毎日ホテルの部屋をとり、いろいろな遊びをして楽しむとそれぐらいにはなる。さらに私は、町々に複数の愛人を抱えていた。彼女たちの生活費や住居費を合わせると結構な金額になった。数えてみると、私には、スラカルタ、クラテン、ボヨラリ、プランバナン、ジョグジャカルタ、バンドゥール、そしてサマスといった町々に、一六人も愛人がいた。あきれた話だと思われるだろうが、一軒の家に住む母と娘をまとめて愛人にしたりもしていた。

賭博と売春の世界にとどまっていたころ、私は酒を呑むことはなかった。酒を呑むようになったのは、重犯罪の世界に足を踏み入れてからだだった。仲間たちは、悪事を実行する前に、なかば強制的に私に酒を呑ませた。酒を呑むことによって身体が温まり、やる気もみなぎる。盗みを行うための勇気もわいてくる。ついでに言ってしまうと、ジャカルタでぶらついていた時代に私は、メガドン、レクソタン、ニパムという薬物をおぼえ、どうしようもないほどそれらに依存していた。その三種類の薬をいっしょに飲まなくては眠れないほどであった。

一九九四年、妻がサウジアラビアから戻ってきたときに問題は起きた。妻は、女性出稼ぎ労働者として、一九八九

年から九四年までサウジアラビアに渡っていた。その間に彼女が仕送りしてくれた金をすべて、私は愛人たちの放蕩のために費やしていた。間違つたことをしたという気持ちから、私は大きな仕事に乗り出した。ジョグジャカルタ市のバクル・バルの集落で、七キロの金と八〇〇万ルピアの現金を得るための強盗に及んだのである。

この仕事に際しては、事前から、捕まるのではないかといい悪相が出ていた。しかし、早急に妻を安堵させたいという気持ちに押され、私はタブーを破ることになった。良日を探すことが困難でありながら、多額のお金を得ることを迫られていた。ジャワ暦というクリウオンの日曜日に犯行を予定した。日曜日は五の数字で表され、クリウオンは八の数字で表される。合わせて一三である。ジャワの運勢暦の数え方にしたがえば、その日は、西方の地域に住む者は東の地域で窃盗を行つてはならない。しかし、農村に伝わる数え方にしたがえば、ポ（パクルという語からの派生）はジャワ語の文字の並びのうち一番目にあたる。その結果、ジャワ暦の曜日の数値と農村式の数値の合計が二四となり、それならば三で割り切れる。合計が三で割り切れるということは、身が安全であり、捕まらないということの意味する。そうした理屈をこじつけながら、私は、まず北へ向かい、続いて東に向かい、その後ようやく北から南へ向かうかたちで目的の家に到達するという方法をとることによって、運勢の調整を行ったつもりでいた。

もともと、悪相が出ているという事実を重く受けとめてはいたので、強盗を終え収穫を得たのちは、ただちにそれをこの仕事に関わつた五人の仲間で分けた。各々が、種々のアクセサリーの形をした一・二キロの金と一四〇万ルピアの現金を受けとつた。私は、自分が不死身の術を身につけていてとまだ信じていたので、その強盗事件の後も、なに食わぬ顔をして生活した。収奪品であるアクセサリーの金を妻に見せたりもしていた。ところが、強盗仲間の一人であつたバントゥール県出身のスパンデイが警察にかぎつけられた。スパンデイは、両脚を撃たれ、片耳を切り落とされた。それをきっかけに私にも捜査の手が伸びることになった。

ある日、私と妻は市場へ出かけた。偶然にもその帰り、私たちはいつもと違う道を歩いていた。家に近づいたとき、人のにぎわいに気づいたので、近くにいた隣人に何が起きているのかを尋ねた。警察が大勢で私の家に押しかけているという答えであった。私はすぐさま妻を連れてオートバイに飛び乗った。そして遠くマジヤラヤとチルボンの方面に逃げた。なぜそちらに逃げたのかというと、チルボンで私たちは、購入証明書を求められることなく金を売却することができたからだ。強盗して得た金の一部をチルボンで売却した後は、旧知の友人の住むランペンに渡った。

ランペンに渡ってもなお、ジョグジャカルタの地方警察は私の居場所をかぎつけた。私が頼って身を寄せた友人は、警察に腹を撃たれて腸を切断された。この友人は現在にいたるまで人工肛門を使って排泄を行っている。私はといえば、追っ手に囲まれたその場所からなんとか逃げ出すことができた。私と妻は、オンテル自転車⁸で、二日二晩、一二〇キロの距離を疾走した。警察の追跡を逃れるために、森の中で睡眠をとったりもした。そしてようやく安全になったことを確かめると、私はランペンのメトロで自転車を六万ルピアで売却した。

警察の追跡を逃れて安全になったと感じたので、私と妻は、さらに警察から遠ざかるためにマジヤラヤへ戻った。ところが戻ってみると、マジヤラヤでも大勢の警察官が私を探していた。そこで私はリアウに身を隠そうと決めた。私と妻は、リアウ州ラワサリのソレックにある政府奨励移住区¹⁰をめざした。私たちは、そのときまたまた、いかにも貧農という風情の質素なみなりをしていた。そのため、手に持つ鞆の中には何オンスもの金のアクセサリ^{きん}を忍ばせていたにもかかわらず、現地の村長から優しく迎えられた。それどころか私は、居住する村の警護団長に選ばれたりもした。

ひと月半のあいだその移住区に住んだが、そこで急に妻がジャワへの郷愁に駆られ、帰ってしまった。それからひと月半後、私の居場所を吐かせる目的で、警察が妻を捕まえた。まもなく私も逮捕されることになるのだが、逮捕ま

での三日間、私は同じ夢を見つづけていた。その夢の中で私は、血まみれのホースに取り巻かれていた。その予感どおり、三日目にオートバイに乗った二人の男がやって来て、ヌル・ハデイ・ウイドドという人物を知っているかと私に訊いた。それは自分だと答えると、二人はすかさず私の頭部にむけて銃を構えた。彼らは、妻が私の居場所を白状した後でこちらに派遣された刑事であった。

私はソレックの地方警察署に連れて行かれた。刑事たちは私が不死身の呪術を身につけていると信じていたので、私はひと晩中、下着一枚で過ごすことを強いられた。翌朝、私はリアウ州のバンキナン警察署に移送された。そこからは非常に残酷な拷問が私に対して行われることになった。毎晩、私は、地方警察の刑事たちによって、生けるサンドバッグのように扱われた。夜が来ると、便所の肥溜めのなかに首まで浸からされた。身体が、想像できないような腐臭を放つようになった。その後は新米刑事たちが拷問のやり方を教わる際の練習台として使われた。はじめに、指導役の刑事が新米たちに、一撃で動きを止める身体のポイントを教えるときの標的となった。指導役が私の身体のあるような場所を殴りつけたあと、今度は新米たちが、もっと激しく同じことをした。毎晩殴打の練習台に使われることを思うと、私は生きる希望を失ったも同然の気持ちとなった。幸いなことに、その施設の総監にあたる人物が、こ

5 マジャラヤは、西ジャワ州バンドン市郊外の町。

6 チルボンは、西ジャワ州北岸の都市。

7 ランブンは、スマトラ島南端に位置する州。

8 オンテル自転車とは、一九七〇年代から都市部で普及した二八インチタイヤの自転車のこと。

9 リアウは、スマトラ島中部にあり、マラッカ海峡に面する州。

10 インドネシア政府は代々、「トランスミグレーション政策」として、過密地域であるジャワ島から外島の過疎地域へ人口を移転させる政策を進めてきた。

の男は一時的に預けられた移送中の身であるから、拷問してよいわけではないと部下たちを諭したことによって拷問は止んだ。

五日間にわたって毎晩サンドバックにされたあと、ようやくセンパティ航空の飛行機に乗ってジョグジャカルタに移送されることになった。ただ、飛行機は、ジョグジャカルタまで飛ぶのかと思つたらそうではなく、ジャカルタの空港に着陸した。ジャカルタで私はひと晩、グロゴル区の軍管役所に預けられた。私は五人の政治犯を収容する牢屋に入られたが、同僚のその政治犯たちの様子を見て、なんとも惨めな気持ちになった。彼らは米飯とビニール袋に入った飲み物を支給されていた。牢屋の片隅を見ると、残飯が、刺すような腐臭を放つて積み重なっている。支給された米飯が、食べられるような代物ではなかったのだろう。彼らの身体は干からびたように痩せ細り、毎日の水浴びも許されなかったため、臭い匂いがした。

翌朝、私はガンビル駅から汽車に乗せられ、ジョグジャカルタのトゥグ駅で降ろされた。ジョグジャカルタに着くと、そのままングパサンにあるジョグジャカルタ地方警察署の営舎に留置された。警察に留置されているあいだ、面会に来てくれたのは、婆さんと母と兄のたった三人だけだった。家族や友人の多くが、私の悪行に怒りや恥ずかしさを覚えたあげく、私を憎み、遠ざかろうとしていることが明らかだった。

私が留置所の中にいたとき、妻は、その母やきょうだいたちに、離婚をするよう説得されていた。延々と続いたその説得の勢いに負け、最後は妻も離婚に気持ち傾いた。そしてクロン・プロゴの宗教裁判所に離婚の訴えを申し出した。ところが、離婚の協議に入る前、妻は再び女性出稼ぎ労働者としてシンガポールへ旅立ってしまった。

取り調べのために、私はジョグジャカルタの地方警察署に二ヶ月のあいだ勾留された。ここでも私は粗暴な扱いを受けた。ただし、拘留されたほかの仲間と比べると運が良かったといえる。仲間たちは、すでに降参しているという

のに銃で脚を撃たれていた。¹¹ 私は、彼らのように撃たれることがなかった。それは、警察で曹長の地位にあった従兄弟がたまたま、私が取り調べを受けていたジョグジャカルタ地方警察署に奉職していたためである。従兄弟は、同僚に対して、私を暴力で虐待するのはかまわないが、撃つのはやめてほしいと頼んでくれていた。ただ、残された私の財産である六オンスの金と二百万ルピアの現金は、証拠品などといって没収されてしまった。

取り調べが終わると、私は仮入所者としてウィログナン刑務所¹²に移送された。そのとき私が刑務所に入って感じたのは、そこはずいぶん居心地がよくて、刑罰を受けているような気がしないということであった。私にはまだ小金があり、¹³所内で賭け事をすることも、宴会を開くことさえもできた。そこそこの食事でありつけたし、所外からの差入れも頻繁にあった。

私が起こした強盗事件についての協議が幾度も行われている最中に、ある検察官が私に刑期の希望を聞きに来た。彼が私に伝えたのは、刑期を短くしたければそのぶん私の支払い金額も高くなるということだった。そのときの金額リストの内容は思い出せない。残った六オンスの金と二百万ルピアの現金はすでに警察に持って行かれ、私自身は大金を動かせる身ではなかったため、検事がもちかけた交換条件には応じられなかった。そしてとうとう私は、検察団によって五年の服役を求刑された。

懲役五年という重刑を求刑され、私は気が重くなって荒れた。同様の罪を犯した者たちは、長くて二年半の刑期で

11 逃亡を防ぐために警察がこのような方法をとるらしい。

12 ジョグジャカルタ市の中心であるマリオボロ通りから徒歩二〇分ほどの距離にあるタマンシスワ通りに所在する刑務所。

13 こうした小金は、面会に来た家族や知人から受け取っていた。

済んでいた。鬱屈した感情を吐き出すために、私は受刑者仲間にも暴力をふるったり、喧嘩をふっかけたりした。しかしその後、裁判による判決が四年になったと聞いて、なんとか現状を受け入れ、気持ちを落ち着かせることができた。夜が来て、刑務所に静寂がもたらされると、私はしばしば物思いに沈み、過去の行いを顧みるようになった。かつて王様のような暮らしをしていたにもかかわらず、私自身、幸せを感じてはいなかったと思ひ返すようになった。女性の気を引く呪術を身につけ、十六人ほどの妾を得た。賭博では負け知らずだった。窃盗や強盗も、警備の目をかいくぐって成功を収めつづけたが、ついにはこうして牢屋に入っている。

運命について思いをめぐらせていたころ、同房の西側で寝起きする仲間たちの姿に目を留めるようになった。よく見ると、彼らの生活態度のなんと落ち着いた様子であることか。西側で寝起きする彼らの多くは、家族が面会に来ることもめつたにない貧しい受刑囚であった。にもかかわらず、彼らの表情は平穩であった。彼らはまた、他人のあれこれに口を出すこともなかった。ムニール¹⁴とその仲間たちは、自由を奪われた身でありながら、いらだつた様子を見せなかった。一方、東側で寝起きする私や私の仲間たちは、贅沢な刑務所暮らしをしていた。強盗犯というのは、刑務所内では非常に畏れられた存在である。私たちは、面会を終えた受刑者たちに食べ物やタバコを奉納させていた。財産や自由の面ではそのように恵まれた立場にいた私たちであるが、他方では、人生の現実を前にして、常にいらだつたり、不安を感じたりしていた。

そのことに気づいた頃から、私は、西側の受刑囚たちの穏やかな表情の裏にあるものを知ろうと、彼らに近づき、付き合うようになった。強盗犯の仲間が、私がムニールたちと付き合うことを喜ばなかったが、私はその付き合いをやめなかった。真の損得を考えた結果、私は強盗犯の仲間から外れることを覚悟のうえでムニールたちとの付き合いを深めたのである。私の頭にあったのは、いつか刑務所を出たあと、平穩で幸せに暮らすための本当の助けとなるの

は、仲間ではなく宗教ではないかということであった。やがてわかったことであるが、真の幸せとはたしかに、ムニールやその仲間たちも行っていたように、神にすべてを委ねることによってしか得られない。

たまたまそのような時期に、ラマダーン¹⁵を迎えるまでのひと月の間のものとして、刑務所では、所外の社会団体による宗教行事が催された。その行事の期間中に、私はクルアーン読誦や礼拝に熱心な受刑囚をさがし、彼らにクルアーン読誦や礼拝の仕方を教わろうとした。熱心な者たちは、殺人罪に関わった受刑囚のなかに多かった。私は彼らにこう言った。自分は強盗で財産を築きはしたが、人生において幸せや充足を感じたことがない。礼拝やクルアーン読誦をまじめに行うことで真の人生の平穩を味わうことができるかもしれないと考えている、と。すると彼らは、礼拝の仕方を書いた小さな手引き書を貸してくれた。私は彼らに混ざって礼拝に参加することになった。

私は宗教についてまったくの無知であった。「アリフ」というアラビア語の文字があることさえも、彼らに教わり初めて知った。まったく私の無知といえ、ラカート¹⁶さえも一から覚えなくてはならなかったほどである。スレマン出身のムカヤット、バントウール出身のカルソノ、シトウボンド出身のシヨレ、バントウール出身のギト爺、ジョグジャカルタ、ジュティス出身のバンバン・プルノモたちをおして、私はひたすら勉強を続けた。彼らは、殺人罪に関与して服役する者たちだった。殺人罪に関与した服役囚がなぜ往々にして日々の神への奉仕に熱心になるのか、私もよく知るわけではない。

14 西側で寝起きする受刑囚の一人の名前。

15 ラマダーンは、イスラームにおけるヒジュラ暦の第九月。信徒の義務である断食が行われる月。

16 ラカートとは、イスラームのお祈りの仕草。一回起立し、一回身をかがめ手を膝までおろし、二回ひざまづいて頭を床まで下げる。

どうにか自分を改善したいというこの私の気持ちは、ただアツラーの導きによって生まれたのではなく、困難に困難が積み重なっていまにも折れてしまいそうな心の状態に理由があつたのではないかと思う。仮にそのときの私が高まらだ、汚れた財産にまみれ、さほど困難を感じていない状況であつたなら話は違つていただろう。実際の私は、善行によつて免れえるものならば、もう再び刑務所には入りたくなかつたし、欲しようが欲しまいが、そのためには宗教を学ぶよりほかに道はなかつたのである。

そうして礼拝やクルアーン読誦を勉強しているとき、精神的な試練も受けた。同門であつた三人の強盗仲間が同じ牢屋の中にいたのだが、彼らは、私が礼拝やクルアーン読誦の勉強に励んでいるのを気に食わない思いで見つていた。彼らは私に対して憤り、こゝ警告をした。「友である俺たちを恥ずかしめないでくれ。強盗が礼拝なんてするものじゃない」。私は私で、礼拝を規則正しく真剣に行う気持ちが固まつていたこともあり、彼らの嘲笑や、ときには脅しにも怯むことなく礼拝を続けた。あるときは、礼拝の後に祈りを捧げていたら、強盗仲間たちが「あんたの祈りは通じたぜ」と言いながら、私の身体にバケツいっぱいの水を浴びせたりもした。

もし私の意志や決意が強固なものでなかつたならば、彼らの侮辱や罵り、非難、ときには脅迫に対して持ちこたえることはできなかつただろう。時折は私も、まっとうな道を歩もうとするだけ重い試練がついてまわるような気がして、なぜ善行を続けなくてはならないのかとため息をつくことがあつた。それでも自らを変える決意が固まつており、家族や社会にとつて意味ある人生を送りたいという願望を抱きつづけていたからこそ、この同門・同房の仲間たちのさまざまな妨害に耐えながら、礼拝やクルアーン読誦の勉強を続けることができたのである。

結局、私は、その同門の仲間たちとは別の房に入れてもらうよう看守たちに願いを伝えた。仲間には邪魔されることなく礼拝やクルアーン読誦を勉強したいからだとして理由を言つたとき、看守たちは私の言葉を信じようとはしなかつ

た。彼らはその後しばらく私の行動を観察し、私が実際はじめに礼拝やクルーン誦読に励んでいるのを確認してから願いをかなえてくれた。そして、房を変わってからは、私は本当に気持ちよく、落ち着いて、礼拝とクルーン誦読の勉強に励むことができた。

困ったのは、以前の房の仲間たちが受刑囚の食事の割り当てを担当していたことである。私の食事の割り当ては彼らとの関係のいかんに応じたものとなり、したがって私は、刑務所が用意する最低限の食事しか口に入れることができなくなった。以前、私は、刑務所外の知人や身内が面会時に持ってきてくれるもので食事を補完していた。その知人も身内も、面会に来ることがなくなっていたので、私にはただ刑務所の食事の割り当てのみが残されることになった。房の移動によって、むしろ、私と同門の仲間との関係は疎遠になっていった。彼らは私のことをおかま呼ばわりしたり、礼拝やクルーン誦読を行う腰抜けの強盗だなどと呼んで、故意に私から遠ざかっていた。だが、そうして彼らと疎遠になったことで余計に、私は神によって示されたまっとうな道に立つて生活しようという気持ちを強めた。どこへ行くとともに肌身離さずイクロ¹⁷を持ち歩くようになった。

そんな私を見て、とうとう刑務所の役人が、明らかに更生中であると私のことを評価するまでになった。私はEブロックに移動となり、すぐに房の宗教部門のリーダーとなった。しかし、そのまますつきりと善行に励むことができたわけではなく、現実には再び試練がやってきた。人が礼拝やクルーン誦読を好まない者たちがいて、災いを作り出したのである。ある日の夕刻、私と同房のバルジョ、ンガデイミンは、インスタント・ラーメンと調理済みの野菜の差し入れをもらい、あとはそれを口に運ぶばかりであった。二さじばかり食べたとき、マグリップの礼拝¹⁸の

17 イクロとは、アラビア語の基本を解説した教書。

18 マグリップの礼拝とは、日没時の礼拝のこと。

呼びかけが響き渡った。私は食事を中断し、マグリブの集団礼拝に参加するために礼拝所へ向かった。その間に、友人二人はインスタント・ラーメンをたいらべていた。礼拝のとき、私は頭痛を感じた。礼拝が終わり、次のイシャーの礼拝¹⁹までのあいだアツラーへの懺悔を行った。ありがたいことに、イシャーの礼拝が終わる頃には頭痛は治っていた。しかし、部屋に戻ると驚いた。二人の友人はふらふらとしており、気を確かに持てていなかった。彼らは素っ裸で部屋のなかを歩き回っていた。どうやら先刻のインスタント・ラーメンにチョウセンアサガオの実が混ぜられており、そのため二人はひどく酔っているのだった。チョウセンアサガオを食べ物に混入させた者たちは、翌朝、数人の看守によって大いに懲らしめられたあと、特別房に入れられた。

さらなる更生がみとめられるという理由で、私はFブロックに移された。ラマダンの直前になると、刑務所の中においても短期集中イスラーム塾²⁰が催された。当初この企画には六〇人ほどの服役囚が興味を引かれて集まったが、最後まで残ったのは私だけであった。この短期集中イスラーム塾が開かれていたとき、私は指南役にあたっていたヤント先生に、常に落ち着いた心でいられ、人生の荒波に向きあう心得を与えてくれるような善行を教えてください頼んだ。ヤント先生に言われたように、礼拝の後にある言葉の朗唱を行うと、一週間も経たないうちに親が私の様子を見に訪れた。そのようなこともあったので、私は宗教の価値や教えをますます固く信じるようになった。

私や家族の人生が大きく変わるきっかけをもたらす善行があるのではないかという期待から、私は再びヤント先生に会って、その点について尋ねた。ヤント先生は、夜半の礼拝²¹を行うこと、クルアーンを読むこと、そして歩むべき道をお示しになるように必ずアツラーに祈ることを私に勧めた。ラマダンが始まってから、私は夜半の礼拝とクルアーンの説教とアツラーへの祈りを、全身全霊を注いで行った。それと時を同じくして、私の中に、家族に対する深い懐かしみの感情が湧き出てきた。もう長い年月、彼らは刑務所にいる私のことなど気にかけていないだろう。そう

思いながら私は、一年半のあいだ、休むことなく毎晩、夜半の礼拝を行った。夜半の礼拝を終えると、私は必ず、誠心誠意をこめてアッラーに次のようなお願いをした。「おお神よ、あなたに対して敬虔な家族、ムスリムの家族を私にお与えください。私の妻が疑いなく私の相手であるならば、どのような私たちでもよいので私に妻をお返しください。しかし、もし彼女が私の相手でないのなら、どうかより良きものを、より心を癒してくれるものを私にお与えください。私にモスクとプサントレンをお与えください」。そして私はクルアーンの「恐れ戦く章」を朗唱して眠りにつくのであった。

ある晩、私は夢を見た。家畜の餌にするための草を刈っていたところ、スハルト大統領²³がその作業を手伝ってくれた。私の心の中の声が、どうかこの夢が現実であつてくれと言った。まもなく私は、刑務所長と管理部から、農業分野の管理者になるよう任命された。親が百姓であり、農民だらけの環境で育つたにもかかわらず、私自身はこれまで農業に携わったことがなかった。それなのに管理者ときたものだ。ところが、農業分野の管理を任されたことによる結果は、すばらしいものであった。受刑囚の食料として植えたチンゲン菜やナスなど種々の野菜類の育ちがとて良く、従来になかった、あふれんばかりの収穫がもたらされた。

19 イシャールの礼拝とは、概ね夕食後に行われる夜間の礼拝のこと。

20 インドネシアでは、ラマダーンの直前や最中に、草の根レベルで宗教の講話会や勉強会が普段より頻繁に催される。

21 とくに願いたいときなど、定められた五度の礼拝以外に、深夜にも行う礼拝のこと。

22 プサントレンとは、イスラーム寄宿学校のこと。宗教を中心に据えた教育を行う。前近代から存在する形態の学校であり、普通学校を選ばずプサントレンに通う子どもも一定数存在する。

23 スハルト大統領（一九二八—二〇〇八年）は、インドネシアの第二代大統領。一九六七年に就任。長期政権を確立したが、一九九八年、民主化運動を受け、退陣。

野菜園の管理において残したその功績のおかげで、私は刑務所の役人たちからますます高い信用を得た。私は社会同化の機会を与えられ、刑務所の塀の外で金曜礼拝に参加できるようになった。そしてまた、一九九七年の四月には、刑務所長とともに、ジョグジャカルタのアフマド・ダーラン大学で開催されたセミナーにパネリストの一人として列席した。それ以後、私は、Aブロックの特別同化房をあてがわれるという待遇を受けた。このAブロックにいるあいだ、私は刑務所の塀の外で自由に新鮮な空気を吸うことを許された。刑務所の塀の外で労働をすることも、市場で買い物をすることもできた。それどころか、刑務所へ戻る時間さえ守れば、友人の家を訪ね歩くこともできた。Aブロックにおける私の活動は、宗教的な奉仕に多くの時間を費やした。夜中の一時には起床し、夜半の礼拝を夜明けの礼拝の時刻まで行なった。夜明けの礼拝が終わるとクルアーンを読んだ。それが終わってようやく市場で買い物をし、料理をし、朝食をとるのである。

一九九八年一〇月九日、私は刑務所を出所した。三年に及ぶ塀の中の生活で更生を認められ、一年の減刑を得たのである。礼拝や宗教の勉強を続けた熱心が評価され、「カム・ロード」という最も優秀な受刑囚の称号を授与された。数人の刑務所係員に付き添われて、私は姑の家に向かった。なぜ姑の家だったのかというと、妻がシンガポールへ出稼ぎに行ったとき、子どもたちをそこに預けていたからである。その日の朝、私がもう刑務所の服役囚ではなくなくなったという事実を知る家族はいなかった。私自身は、私の帰還が家族や社会に受け入れられるのかどうかかわからないままで、とても不安な気持ちであった。

姑の家で暮らし始めて一週間を経ないうちに、私は村や近隣社会の役職者を家に招待した。彼らの前で私は、社会復帰し、善行に励みたいという希望を涙ながらに表明した。私は、周囲が私を喜んで受け入れてくれることを望んで

いた。そして、約束を果たすため、刑務所にいるときから心に決めていた孤児院とブサントレンの建設をめざすことにした。ひと月のあいだ私は、礼拝やクルアーン読誦その他、宗教の基本的な事柄を教える相手となる生徒を探してまわった。けれども、その努力がすぐに実を結ぶことはなかった。なぜなら、社会はまだ私の志を一〇〇パーセント信じているわけではなかったからだ。

周囲から積極的な反応を得られていないと感じたので、一九九九年一月一日、私は自分の母の家に移り住むことを決めた。母の家に戻って二ヶ月ほど経ったころ、妻の弟が、姑や私の子どもたちにも、妻がまもなくシンガポールから戻り、そのままバントゥールの親戚の家に向かう予定であるということを知らせていた。その後、二人の子が、バントゥールへ行つて母親に会つてきたばかりであることを私に告げた。その翌日、私は親戚の家に向き、妻と顔を合わせた。妻の弟が、二人が会うことを望んでいなかったため、この訪問は騒動を招いた。妻の弟は、知り合いのチンピラ連中を呼んで、妻と私が会えないように妨害をした。

そうした扱いを受けて私は非常に怒り、そのチンピラ連中とやりあった。劣勢となった彼らは、あわてふためいて逃げた。結局、私の家庭内の問題、つまり私と妻との間の問題は、その解決のために警察の介入まで要することになった。明らかかなこととして、私自身は再び妻とともに暮らすことを望んでいた。他方で、妻のきょうだいや親はそれを望んでいなかった。結局、妻は、警察に付き添われるかたちで、私のいる家へ向かう準備をととのえた。私の親族一同と妻の親族一同が話し合いを行った結果、妻が私のもとに帰るのを許すことでようやく話が収まったのである。

妻がシンガポールから帰国する二ヶ月前に、私は妻に電話をし、自分が刑務所を出所してすでに家に戻っていると、いう事実を伝えていた。それから二ヶ月という短い時間で彼女が帰国したことは、まったく神の慈悲であったと感じる。なぜそうでないといえるだろう。祖国に帰ろうという気持ちがあるのは、かつて彼女が私を避ける目的

であちらに旅立ったことを思えば不思議なことである。祖国に戻りたいという彼女の気持ちがいかに強かったのかは、あちらでの給料の数カ月分が未払いであったにもかかわらず、彼女がその請求に固執しなかったことや、衣類をすべて職場に置いてきてしまったことからよく窺えた。

村の雰囲気になじみが欠けていることをなんとかできないかと思ひ、私は手始めに、自分の母に礼拝とクルアーン読誦の勉強をするように勧めてみた。「おふくろ、礼拝の仕方を教えてあげようか？」と私は母に尋ねた。「もちろん教えてほしいとも。でも誰がそれを教えてくれるんだい？」と母は問い返した。「もちろん俺だよ」と私は答えた。そうして礼拝をおぼえた母は、やがて友人を誘うようになった。とりわけ八人の後家さんたちが、母の家で熱心に礼拝とクルアーン読誦を勉強するようになった。彼女たちは、私が礼拝やクルアーン読誦の指導を上手にやることを認め、子や孫を同じ場所に誘うようになった。やがて母の家は人であふれるようになり、私の指導つきで宗教を勉強する場所としてはもう手狭で使えなくなった。

この状況の進展に手応えを感じた私は、皆にモスクの建設を提案した。私のもとに通う人びとの勉強意欲は最高の状態に達していたので、提案は十分すぎるほどの熱意をもって受け入れられた。そして、ありがたいことに、わずか六ヶ月の間に、七メートルの幅と一一メートルの奥行きをもつモスクを建設し終えることができた。おかげで、礼拝とクルアーン読誦の勉強が、それまでよりものびのびと落ち着いた気持ちで進められた。そして、これと並行して、孤児院とプサントレンも、勉強に前向きな一〇〇人の生徒を抱えて運営が始まった。

私は、人生の本当の幸せというものを感じるようになった。私は自分のことを、卑しい社会のゴミだと思つて生きてきたし、私のことをまつすぐに見つめてくれる人もまたいなかった。だが実際には人びとは、思つたよりも大らか

に私の誘いに応じてくれ、私の住む場所で、あふれんばかりの熱意をもって礼拝やクルアーン読誦の勉強に取り組んでいる。私はそれまでの自分に対する評価が誤りであったということ、実際には私はまだ役に立つ人間であり、周囲の人びとから信頼してもらえる存在であるということを知った。モスクでの集団礼拝の引率を終えたあと、私は平穩で幸せに満たされた気持ちになって礼拝の参列者と対面する。それは、以前には経験したことのない気持ちであった。年配の男や女たちが、その子や孫を連れ、日に五度の礼拝のためにモスクを訪れる。彼らに礼拝の仕方やアラビア語の表記を教えるのは、国立の小学校から卒業認定を受け直したばかりの私である。実のところ、私はまだ人の役に立つ人間であり、私の伝える善き行いというものが、聞く耳をもって迎えられ、実行されている。そのような楽しみに浸りながら、私の唇は休むことなくいつまでも、アッラーへの感謝の気持ちで唱えている。

だが、私のプサントレンの存続をめぐることは、アッラーから試練を与えられたこともある。ある時期、一〇〇人もいた生徒のうちのほとんどが去ってしまい、わずか六人のみが残る事態となった。ある男子生徒と、私の集落に住む女子の結婚の約束が反故となる出来事が生じ、結果としてそうした事態につながった。どのような経緯で婚約破棄に至ったのかはわからない。少なくとも明らかだったのは、結婚が近づいたとき、男子生徒は婚約者のことを好いていく態度をまったく見せていなかったということだ。男子生徒はその相手との恋愛関係になにか不具合を感じていたらしい。一方、集落の人びとは、その婚約破棄の一連の過程に私が関与しているという結論を下し、預けていた子どもたちをプサントレンから引き戻した。順調に築き上げてきた私への信用は、このとき再び下落した。

その後、生徒をあちこちから募ったかきがあり、西暦二〇〇〇年から〇一年にかけて、私のプサントレンは活気を取り戻した。私は、外部からの支援金に頼らず、生徒の食費や学費をすべて自分が賄うことを決めていた。そうした事情もあって、チーク材の原木を扱う商売の世界に足を踏み入れた。その方面ではすでに経験があったし、ジョグ

ジャカルタやその近辺ではチークの木の栽培を行う住民が多くいたからである。私は木材流通の仕事に喜びを見出し、ひと月で六〇立方メートルのチーク材を販売するまでになった。そして、家具の販売にも手を伸ばした。原木を売るだけでは収入が限られていたからである。木枠やドアや窓、それにさまざまな家具を売ることで、収入は増えるはずであった。ところが、その目論見は外れ、私は破産するまでに追い込まれた。発端は、先の二〇〇四年総選挙で使用する投票箱を注文したある投機家の行動であった。結果のみをいえば、投票箱を作るために私が銀行から借りた七千万ルピアが、すべて泡となって消えた。

その投機家の行いよりも私を悲しませたことがある。それは、プサントレンの生徒が再びいなくなってしまったことだ。五〇人ほどいた生徒が一人にまで減った。その状況において、私は夢をみた。夢の中で私はある人に、お前の務めは子どもたちを養育することだと諭された。ほかの仕事をしながら子どもたちを育てようとすると、良い結果がもたらされないのは当然である。子どもたちを養育したのであれば、ほかのことに脇目をふらず、そのことだけに集中しなくてはいけない。夢の中でそう気づかされてからは、夜中の礼拝を終えるたび、私は神に、どうかこの孤児院とプサントレンの経営が落ち着きますようにと懇願しつづけた。アツラーよ、ただあなただけが力をお持ちです。私はまったく力なきものです、と。

さほどの時を待たず、ある友人が私の家を訪ねてきた。話によると、彼もまた事業に失敗して破産し、運営する孤児院の子どもたちが痩せ細っているという。結局、その友人が養育していた一四人の子どもを私が代わって預かり、育てることとなった。それから現在まで一年ほどの時が経つが、私の生徒は、寮に住む者だけで六〇人、実家からの通いの者が二七人いる。私が管理するこの孤児院は、開設してまださほどの年数を経っていないにもかかわらず、ありがたいことに、イスラーム系の孤児院としては最も生徒数の多い部類に入る。

私にとって孤児院やプサントレンの子どもの養育は、最も重要で、最も優先すべき仕事である。私は、過去の罪や過ちを償うためには、これが最良の道であると固く信じている。五度の礼拝と夜中の礼拝と、ほかにもさまざまなかの奉仕を行ってはいるが、それだけでは過去の罪や過ちは償えないだろう。そう考えて私は、すべての力と知恵と人生の時間を孤児院の運営に注ぎ込むつもりでいる。孤児院のためになることならば、たとえ地を這ったつてかまわない。ただひとつ問題なのは、私が外で資金を稼ごうとすると、以前そうなつてしまったように、プサントレンでの教育がおおざりになる。だからといって、プサントレンにかかりきりでは、今度は資金をどうつなぐかが問題となる。そのような状況ではあるが、アツラーの示された道を歩むかぎり、この孤児院とプサントレンの運営においても必ずやアツラーの救いの手があると信じている。以上が、私の近況である。

私は、社会があらのままの私を誠実に迎え入れてくれるということを感じてきた。現在私が管理するプサントレンは、種々の問題が起きたときの人びとの拠り所となっている。入院中の家族の治療代を求めて訪ねてくる人もいる。わんぱく坊主に手を焼いた親が協力を求めてやってくることもある。はたまた、親や友だちの金や持ち物を盗む癖のある子どもをプサントレンに預け、教育してもらうために来る親もいる。人びとは、自らが直面するさまざまの問題の持ち込み場所として私を位置づけてくれている。私もまた、それに応えて、善事と真理のためにこの身を捧げる覚悟を決めている。

宗教を知り、実践しはじめてから、私は本当に、いかに小さな楽しみでもその意味するところの大きさを感じるようになった。私たちの前に立ちはだかるすべての事柄は、面倒な問題を含んでいるようにみえても、実は楽しみとしてとらえることのできるものである。なによりまた、問題を解決できたときは、とくにそれが他人の抱えている問題であるときは、そこにこそ何事にもかえがたい楽しさを私は感じる。モノや欲望の面からいえば、私はかつて十分す

ざるほどの楽しみを得た。しかしそれでいったい何を感じる事ができたろうか。いつも何か足りない気がして落ち着かなかった。それは、いつ、どんなことについても、新たな幻想を生み出す幻想を手に行っているにすぎなかったからだ。おかげさまで、私は、予期せぬかたちでアツラーの導きを得ることができた。アツラーの示す真理にしたがって、人間らしく、その人生を過ごすことができている。

【解説】

久留米大学法学部には、二〇一四年度から「海外体験実習」という科目が設置されており、その引率担当の一人として私は毎年、学生数名を自身の研究フィールドであるインドネシアへ案内している。学生は、事前に実習のテーマと論点を定め、それについて現地で調査をし、帰国後にレポートを作成して提出する。そして報告会も行う。今年度(二〇一七年度)は、九月に、五名の学生を連れてジャワ島中部のジョグジャカルタ特別州に向かったが、学生のなかに二人、日本の刑務所とインドネシアの刑務所の比較をしたいと考える者がいた(彼らは事前に福岡刑務所を見学した)。

出国三ヶ月前から現地の役所と連絡を取り、刑務所の訪問許可を求めたが、お決まりともいえる役所間、部署間のたらい回しにあつてどうにもならなかった。そこで、刑務所生活の詳細を知るための苦肉の策として、フリー・ジャーナリストで、かつ出版社を経営する長年の友人であるオッキー・ムタキ氏とおして「元服役囚」を紹介してもらうことにした。「それならおもしろい人がいるぜ」とオッキー氏に紹介されたのが、本書の語り手であるサンディマン氏である。重犯罪の世界で名を轟かせた凶悪な人物が、懲役四年の服役中に改悛し、出所後は孤児院と宗教学校を設立・運営しているという話にも興味を引かれた。本書の記述は控えめであるが、聞いた話では、サンディマン

氏のかつての凶悪ぶりは実際には単なる強盗犯という枠をはみでるものであり、それだけにいつそう会うことについての期待が高まった。

二〇一七年九月二四日、学生たちとともにサンディマン氏の孤児院を訪れ、氏にインタビューを行った（もちろん主たる聞き手は学生であり、私の立場は通訳であった）。およそ一時間のあいだ、興味深い話が次々と聞けた。そのインタビューの翌日、「これも読むといい」とオッキー氏から薦められ、受け取ったのが、『鉄格子の向こうで御光をつかむ——サンディマン自伝』（原題 *Menggapai Nur Tahi dari Balih Terali Bess: Otobiografi Sandiman*）という表題のついた小さなインドネシア語の冊子（Okkie F. Muttaqie ed., Yogyakarta: Tajidu Press, 2006）であった。出会ってまもなく、オッキー氏がサンディマン氏に自伝の出版を勧め、同意した彼が口述する内容をオッキー氏が編集して出版したものだという。本稿は、その全訳である。

本書には、日本とインドネシアの比較、それも刑務所のみならず社会全般の比較という目的において、重要で、深く考えさせられる事柄がいくつも示されている。それが本書を訳出した大きな理由である。とりわけ、本書を読んだ日本人の読者が最も強く感じるであろうことは、犯罪をおかし、刑務所で服役させられた者が社会復帰をはたすための両社会の環境の相違ではないかと思う。

日本でもインドネシアでも、元服役囚の社会復帰は容易なことではない。「前科者」のレッテルを貼られて就職の道は狭められ、しばしば家族からも距離を置かれる。せつかく娑婆しゃばに戻っても、いわば四面楚歌のごとき状態が待ち受けているわけで、失望して自暴自棄になったり、再犯に向かう人が絶えない。しかるに、そうした傾向は抱えつつも、インドネシアの刑務所には、受刑者の改悛をうながす装置が、地に根を下ろしたかたちで存在する。端的にいえばそれはモスクであり、日々の礼拝であり、折々に行われる宗教行事である。サンディマン氏の人生における重大な

変化も、まさにこの装置が存在し、働いているがゆえに起きたのだといえる。

刑務所を出所したのちの環境についても、日本とインドネシアの間には相違がある。日本の事情はさておき、インドネシアでは、宗教的に改悛した者は、基本的に、しこりや滞りがないかたちで社会に受け入れられる。本書の後半部分におけるサンディマン氏の語りからもその事実はうかがえよう。また、本書で語られていないところで、たとえばサンディマン氏が孤児院とプサントレンを開設したいと考えた際に、相応の費用を出資してくれる団体や個人がすぐに現れたことなどにも、この社会のあり方を知るための手がかりがある。むろん、このばあい、聖典クルアーンという、大多数の住民にとつての共通のテキストの存在が重要である。ここでは、全能の神アッラーが、過ちを犯したのち改悛した者に対しては寛大な赦しがあることを幾度となく伝えている。

インドネシアは、イスラーム法を国家原則とするいわゆるイスラーム国家ではない。また、住民の多くが白装束に身を包み厳格な生活を営んでいるわけでもない。しかし、その社会の内実は、敬神による人の結びつきを随所に感じさせるものであり、その意味で、いたって宗教的である。世俗主義的社会と宗教的社会的のいずれが優るのかといった止め処ない議論はしまっておくとして、その両者の相違を認識すること、そしてその認識の上に立つて自社会を相対化し、見直していく態度は、今後ますます私たちにとって必要となるだろう。

本稿には脚注があるが、すべて訳注である(原書に注は付されていない)。また、本稿では話題や展開の大きな変わり目に一行分のスペースを設けたが、これも原書にはなく、読みやすさを考慮した訳者の判断によるものである。